



また、「船場吉兆」「比内鳥」や、「ニチアス」等、有名企業に不祥事が発生している。経営者や幹部が、逃げ回ったり、現場の社員に責任転嫁したり、醜態を曝している。

まことに、卑しい姿です。

故城山三郎氏は、ある講演会で、「経営者の条件として、人間的に卑しくないこと」と述べておられる。なぜ、次々と会社の不祥事が発生するのか…NPO法人・兵庫経営塾では、再三にわたり、不祥事の本質を啓蒙して参りました。

過剰な業績主義、儲け主義、いろいろの背景的要因があり、事実、そういう考え方で経営をしている。しかし、決して、「業績や儲けを求めること」は悪ではない。問題の本質は別にある。

「CSR」(企業の社会的責任)が、初めて問われたのは、昭和47年頃です。なぜ、未だに、徹底せず、次々と不祥事が発生するのか…根本的な視点の置き所に問題があるのではないのでしょうか。

不祥事は、働くこと(仕事)において発生している、働きの成果である「商品」において発生している。つまり、「何のために働くのか」ということを自覚していないところに、真の問題がある。

二宮 尊徳 「自分が生きて行けるのは衣食住があり、それは人々が尽くして、働いてくれるお陰。自分から生かされている。自分を生かしてくれる人々に報いることが、人としての道である」

中村 天風 「人の喜びをわが喜びとする。これは人間だけが味わえる尊い心である。人を幸福にすることが本当の喜びであり、仕事の目的はここにある」

松下幸之助 「仕事は人間を幸せにするためにある」

マックスウェバー 「仕事は神から与えられた使命」である。(「vocation」→職業 天職)

それぞれの会社には、固有の経営理念がある。(はずです)

経営理念は、「このような会社になりたい、なります」「こういう経営をします」という経営者の志、信念を現したものであり、経営者をもっとも、こだわりを持たなければならない。

つまり、機会あるたびに、社内に対して訴え続けること…経営理念の徹底浸透を図ることが大切です。この努力を怠っているところに、不祥事の芽が萌え出す原因がある。

経営者自らが、「悪事」に関与しておれば、全くの論外であり、「本音と建て前が違う偽善者」と言わざるを得ません。

不祥事対策として、法令順守経営(コンプライアンス経営)に取り組む会社が多いという。

「コンプライアンスの実施要領等が大切」と説く、学者や弁護士がおられる。

しかし、いくら立派な仕組みや形を導入しても、「心」がなければ、「仏作って魂入れず」になり、いざれ形骸化してしまう。さらに言えば、「法令順守」は当たり前のことであり、「法令順守経営」をしなければならないという、経営そのものに問題が内在している。

経営理念には、会社の使命が明記されている。そのために仕事をしている。その成果が商品である。

「使命=Mission」を社内に徹底的に浸透することが、不祥事対策の根幹です。

「社会から責任を追及される」のではなく、「社会に対する使命を追求する」のでなければならない。

自社の経営理念について…

- 1) 何が書かれているのか? どういう意味なのか?
 - 2) 社内の隅々に、理解、浸透、徹底しているか?
 - 3) 日々の仕事に生かされているか?
- じっくりと、見直してみてもいいでしょうか?



PROFILE

テクノ経営総合研究所 TECコンサルタント

上田 勝 うえだ まさる

松下電器出身、営業本部および本社経営監査部等を経て、松下流通研修所、販売研修所 取締役所長を歴任
NPO兵庫経営塾 副理事長